

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 27 年 5 月 28 日現在

機関番号：11301

研究種目：基盤研究(B)

研究期間：2011～2014

課題番号：23330153

研究課題名(和文) 社会学文献情報データベースを基盤とした研究者コミュニティの再創造

研究課題名(英文) Rebuilding the researcher community based on the Bibliography of Japanese Sociology

研究代表者

田中 重人(TANAKA, Sigeto)

東北大学・文学研究科・准教授

研究者番号：60294013

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 10,800,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、日本社会学会が作成・管理してきた「社会学文献情報データベース」を再編し、それにソーシャル・ネットワーキング・サービス(SNS)の機能を付加した新システムを作成し、社会学研究者による利用を通じた研究者コミュニティの再創造を図るものである。日本の社会学の研究成果を蓄積してきた同データベースと、近年の情報技術の発達に対応したネットワーク・サービスの機能を融合することにより、文献データを中心とした従来型の学術コミュニケーションとコンピュータ媒介型のコミュニケーション(CMC)との距離を縮め、研究者コミュニティ全体を活性化し、再構成する可能性を提示した。

研究成果の概要(英文)：This research project aims at rebuilding the community of sociologists using information technology. One of the pillars of this project is the Bibliography of Japanese Sociology (BJS), a database of bibliographic information on research in Japanese sociology, maintained by the Japan Sociological Society. Another pillar is a BJS-based new social networking service (SNS) on which the researchers interact. The project offers an opportunity to facilitate and restructure academic communication among sociologists. It bridges the old and new styles of academic communication --- textual (journals and books) and electronic.

研究分野：社会学

キーワード：社会学方法論 ネットワーク データベース コミュニティ

1. 研究開始当初の背景

(1) 日本社会学会が作成する「社会学文献情報データベース」は、日本で発表された社会学関連文献を網羅する書誌情報データベースであり、社会学研究・教育支援、研究成果の公開と社会的還元を目的として運用されてきた。発足は1992年だが、それ以前に日本社会学会がおこなってきた年次文献調査「社会学文献目録」のデータを収録しているほか、過去の文献についても遡及的に収録をすすめてきており、日本の社会学が築いてきた知的遺産を集約・継承・可視化できるものとなっている。現代社会が複雑化するにしたがい、社会学のあつかう対象が拡大し、研究分野が細分化するとともに研究方法が高度化して、社会学研究者同士の共通理解が困難になりつつあるが、そのようななかで、データベースは、古くからある学会大会や学会誌と同様に、研究者間の共通理解を促進し、コミュニティを維持する基盤としての役割を担うものとなっている。

(2) 当初は学会会員からの文献調査によってデータを収集してきた社会学文献情報データベースであるが、調査の回答率がだいに低下し、データベース編集者(日本社会学会内の担当委員会)の情報補完による部分が増大してきた(引用文献)。また、国立情報学研究所や各大学・研究機関等による多様な分野をカバーする学術データベースが研究上便利に使えるようになってきているが、その一方で、多くの研究者は情報の利用者・消費者にとどまる傾向が強まり、自分たちが築いてきた知的遺産を共有していくという意識が弱まってきている。

(3) 一方で、この間にブログやSNSなどのインターネット上のメディアが広く使われるようになってきた。このような電子的なコミュニケーションを通じた研究者コミュニティの構築が新たな課題となっているが、社会学文献情報データベースは、その構造上の制約のため、このような状況に対応できていない。旧来の図書館文献情報のデータ構造をもとにつくられており、今日の情報技術から見れば重要度の高い項目が収録されていないことや、テキスト情報だけの単純な2次元構造であるため、たとえば同一の著者が書いた文献を統一的に把握することができない(同姓同名の著者を区別できない一方で、表記に揺れのある著者名は別人とみなされてしまう)などの限界があり、インターネットを利用した情報の共有がリアルタイムでおこなわれる今日の状況では活用しにくいのである。このため、独立のデータベースとして検索されるだけになっており、ネット上での社会学研究者のコミュニケーションとは切り離されたものになってしまっている。

2. 研究の目的

「社会学文献情報データベース」を基盤として、研究者コミュニティの再創造を目指す。具体的にはつぎの3点が本研究の目的である。

(1) データベースの再編：まず、「社会学文献情報データベース」を再編し、新システムを作成する。電子的な研究者コミュニティ構築に適したシステムにするとともに、情報化・国際化の進展に対応した機能強化を図る。

(2) SNSシステムの構築：(1)で再編した文献データベースを中核として、社会学研究者が参加し、学術的なコミュニケーションをおこなうシステムをつくりあげる。

(3) 社会学理論へのフィードバック：これらのデータベース・SNSを利用した学術的なコミュニケーションのありかたについて、電子コミュニティ論の観点から社会的に考察する。

3. 研究の方法

(1) 本研究全体の基本的な枠組みとして電子コミュニティ論を採用し、関連する既存の知見を集約した。

(2) 「社会学文献情報データベース」現行システムの利用状況のほか、各種学術情報サービスの現況を調査し、参考とした。

(3) コンピュータ工学や図書館情報学の近年の動向を踏まえ、「社会学文献情報データベース」新システム(SNSを含む)の設計をおこなった。文献データをリレーショナル・データベースとして保存するほか、電子媒体文献に対応するための新規項目、ほかのデータベースとの情報交換を念頭に置いたデータ変換システム、登録データについてSNSで「シェア」「コメント」する機能などを盛り込み、システムを作成した。

(4) このようなシステムを使っておこなわれる電子的学術コミュニケーションの特徴について、電子コミュニティ論の知見を用いて整理し、考察をおこなった。

4. 研究成果

(1) ほとんどの研究者にとって、ウェブによる情報収集は日常的な研究環境の一部となっている。特に国立情報学研究所が提供する雑誌論文検索サービスCiNiiは利用率が高く、2014年に日本社会学会会員にオンラインでおこなった調査によれば、回答者の約4割が、年間50日以上使うと答えている。しかし、読んだ文献の内容についての検討や、研究上のアイデアの交換といったより積極的なウェブ利用は、それほど活発ではない。

日本の社会学研究者のアカウントを最も

多く持つウェブサービスは国立情報学研究所の Researchmap であり、専門分野を「社会学」とする研究者が 4000 人以上ヒットする。しかし、それらのほとんどはかつて ReaD (科学技術振興機構が運営していた研究者データベース) に登録していたデータが 2011 年の合併によって移管されたものであり、研究者自身が運用しているものではない。Researchmap はブログや資料公開やコミュニティなどの機能も提供しているが、これらを積極的に研究に利用している社会学研究者は少ない。また、Researchmap の個人研究者のトップページでは、研究者自身の業績等を半自動で収集し、表形式で表示させるようになっているが、それらの業績を他のユーザがリンク付きで言及するような仕組みは提供されていない。

Twitter や Facebook などの一般ウェブサービスを利用する研究者の間では情報の共有や議論がおこなわれていると思われるが、それは少数の「友達」あるいは「フォロワー」の間に限定されているのが通常である。

以上のように、現在のところ、日本の社会学を広くカバーする研究者用のオンライン・コミュニティは存在しない。

一方で、「社会学文献情報データベース」は、存在自体は広く知られているものの、文献データベースそのものの性能としては、収録対象が狭く、網羅的でないなどの理由で、広い範囲をカバーする CiNii などにくらべ評価が低く、使用頻度も低い。ただし、日本の社会学に特化したデータベースであり、学会として蓄積してきた学問的知見の集成であることを評価する意見も見られる。このデータベースを研究者コミュニティ再創造の核とするには、これらの点に留意しなければならない。つまり、単なる文献書誌を集めたデータというよりは、研究者自身が参加してコミュニティ内に形成していく共有財産としてとらえる観点が必要といえる。

(2) 「社会学文献情報データベース」新システムを、XOOPS (会員制サイトなどの構築に適した基本ソフトとして広く使われているもののひとつ) を用いて作成した。学会員は自らの ID でログインして文献情報を登録・編集できる。ログイン ID を持たない一般の利用者も、検索等の基本機能はログインなしで使える。言語は、日本語と英語に対応する。また、PC 画面のほか、スマートフォンなどの小さい画面の端末での利用にも対応したインターフェースとした。

(3) 従来の「社会学文献情報データベース」の構造を再編した。

文献データベースのフィールドのなかには、著者名、雑誌名、出版社名など、同一の情報が何度も現れる。このような情報については、「人名・組織名データベース」などを個別に用意し、文献データベース本体にはそ

れらへのリンク情報を持たせるリレーションル・データベースとした。これにより、すでにデータ中にふくまれる著者や雑誌についての入力の手順を簡略化できる。また、これらの細分化されたデータベースは、それ自体で、研究者や雑誌のデータベースとしても使えるようになる。著者名などの表記ゆれについては、個々の文献の表記を尊重して、無理な統一はおこなわず、同一人物 (等) に対する異なる表記を認める。

抄録・全文などの電子情報を登録できるようにした。これにともない、関連する必要項目を多数追加した。

「文献」として登録されうるものの種類を網羅し、それぞれについて、情報登録の際などに必要とされる条件を設定した。これらの条件を参照することで、文献情報の新規登録や修正の際にユーザに対してきめ細かい指示を出すことが可能になり、登録・編集の負担を軽くした。

(4) 研究者 SNS システムを作成した。これは、上記 (3) の文献情報システムと一体で運用するものである。ユーザ (日本社会学会会員を想定) は、このシステムにログインして、文献情報の登録・修正などをおこなう。また会員同士のコミュニケーションと情報発信のため、プロフィール、ニュースフィードなどの機能を持つ。これらの機能は文献情報データベースと連携して使うことを念頭に置いており、文献を「シェア」したりそれに「コメント」したりして、学術的な意見表明と討論をおこなうことができるようになっている。

(5) 外部のサイトやアプリケーションとのデータ連携をスムーズにするため、個々の文献レコードについて恒久的な識別子 (URI) を発行するとともに、各種ソフトウェアでの形式でのエクスポート機能を持たせた。また、リンクド・オープン・データをサーバ間で交換することにも対応している (ただし、大量の文献データをダウンロード可能にするには、「社会学文献情報データベース」編集著作権の管理上の問題があるため、すくなくとも当面は公開しない)。

(6) 電子コミュニティ論への示唆

従来、研究者コミュニティは主として、(a) 学術論文・著書・書評等のフォーマルなテキストによって構築されるコミュニティと、(b) 学会・研究会等の場における (インフォーマルなものも含めた) 対面コミュニケーションによって構築されるコミュニティという二層から構成されていたと考えられる。(c) CMC (コンピュータに媒介されたコミュニケーション) の普及以降は、SNS などの非対面コミュニケーションによって構築されるコミュニティがこれに加わったが、(c) は主として (b) をインフォーマルな側面から補

完するにとどまり、研究者コミュニティのフォーマルな中核である (a) への直接的関与の可能性は乏しかったと言える。

本研究において構築した、文献情報システムと連携する SNS は、(a) と (c) との上述のような距離を縮小し、(c) すなわち CMC が (a) すなわちテキスト (研究業績) を基盤とした研究者の中核的コミュニティに直接に関与することによって、(a) の社会的文脈をダイナミックに再構成し、ひいては (b) も含む研究者コミュニティ全体を再創造する可能性を提示したものである。

またこのような可能性の提示は、アーキテクチャ (情報技術の構造) を媒介とした社会関係の再コンテクスト化 (文脈の再構成) という、電子コミュニティ論・情報社会論において従来から一般的に議論されてきたテーマに対し、(人文・社会系の) 研究者コミュニティという、これまで論じられることの少なかった特定領域における応用事例を提供した研究として位置づけることができる。

<引用文献>

周藤真也、「社会学文献情報データベース」の現状と課題、社会学文献情報の蓄積システムの構築のための試験研究 (科学研究費補助金研究成果報告書)、2005、44-61

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計 2 件)

樋口 耕一、質問紙調査における自由回答項目の分析: KH Coder による計量テキスト分析の手順と実際、社会と調査、査読無、8 巻、2012、92-96

吉田 純、再帰性概念の社会情報学的意義についての予備的考察、社会情報学、査読無、1 巻 1 号、2012、55-63

〔学会発表〕(計 5 件)

吉田 純、情報ネットワーク社会における親密圏・公共圏の再編成: 再帰的近代化論の視角から、京都大学グローバル COE「親密圏と公共圏の再編成を目指すアジア拠点」研究会、2012 年 2 月 14 日、京都大学

樋口 耕一、中井 美樹、湊 邦生、Web 調査における公募型モニターと非公募型モニターの回答傾向、数理社会学会第 53 回大会、2012 年 3 月 23 日、鹿児島大学

吉田 純、「ネット公共圏」の原型の再発見ニフティフォーラム研究の意義」第 2 回ニフティフォーラム研究報告会、2014 年 3 月 26 日、ニフティ株式会社

樋口 耕一、KH Coder による計量テキスト分析 アンケート自由回答の分析を中心に、第 17 回日本水環境学会シンポジウム、2014 年 9 月 9 日、滋賀県立大学

吉田 純「ネット・コミュニティにおける

親密圏構築の観察」第 3 回ニフティフォーラム研究報告会、2015 年 3 月 27 日、ニフティ株式会社

〔図書〕(計 2 件)

田中 紀行、吉田 純、2014、モダニティの変容と公共圏、2014、京都大学学術出版会 (8-19 を担当)

石田 基広、神田 善伸、樋口 耕一、永井 達大、鈴木 了太、R のパッケージおよびツールの作成と応用、2014、共立出版 (73-128 を担当)

〔産業財産権〕

出願状況 (計 0 件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

取得状況 (計 0 件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕

ホームページ等: <http://sociodb.jp>

6. 研究組織

(1) 研究代表者

田中 重人 (TANAKA, Sigeto)
東北大学・大学院文学研究科・准教授
研究者番号: 60294013

(2) 研究分担者

周藤 真也 (SUTO, Shinya)
早稲田大学・社会科学総合学術院・准教授
研究者番号: 60323242

吉田 純 (YOSHIDA, Jun)
京都大学・人間・環境学研究所・教授
研究者番号: 40240816

中里 英樹 (NAKAZATO, Hideki)
甲南大学・文学部・教授
研究者番号: 10309031

樋口 耕一 (HIGUCHI, Koichi)
立命館大学・産業社会学部・准教授
研究者番号: 00452384